

〈第32回学会大会(大分大学) シンポジウム〉

障害者スポーツからのメッセージ

登壇者

堀川 裕二\* 綿 祐二\*\* 麻生和江\*\*\*

司会

古城 建一\*\*\*

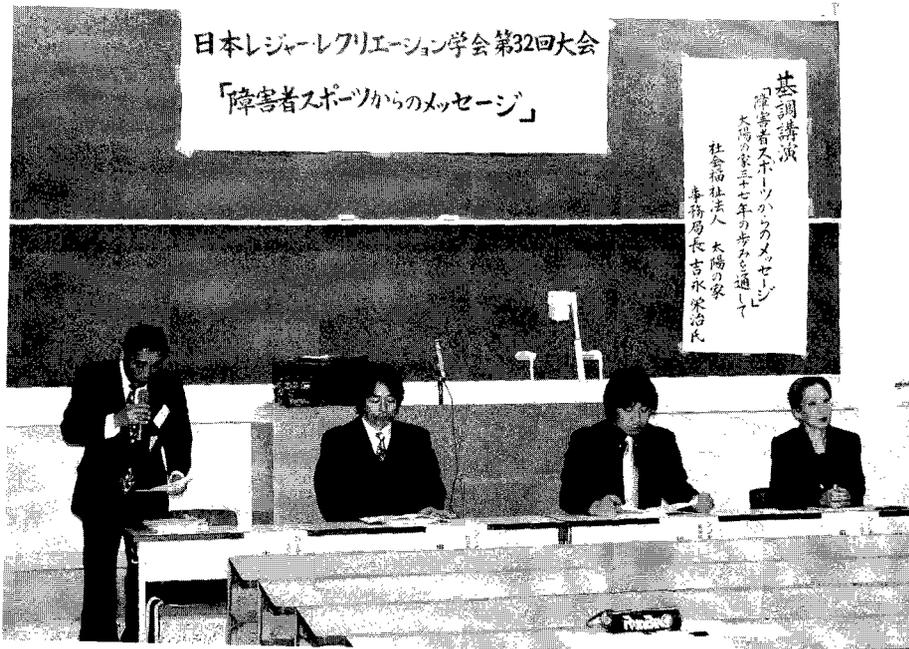
The Messages From Disability Persons' Sports

Symposists

Yuji HORIKAWA\* Yuji WATA\*\* Kazue ASOU\*\*\*

Chair Person

Ken'ichi KOJOU\*\*\*



\*社会福祉法人太陽の家

Japan Sun Industries

\*\*長崎国際大学

Nagasaki International University

\*\*\*大分大学

Oita University

## ○古城

シンポジウムのテーマも、先ほどの基調講演の流れに沿いまして、「障害者スポーツからのメッセージ」ということで設定させていただいております。この統一テーマをもとにしながら、基調講演とともに総合的に考えて行ければと思っています。

最初にシンポジウムの先生方を簡単にご紹介いたします。最初にご報告頂きますのは、太陽の家の訓練課長をなさっています堀川裕二先生です。先生からは、「施設から地域へ～太陽の家の挑戦～」というテーマでお話をいただきたいと思っています。2番目に発表いただくのは長崎国際大学の綿祐二先生です。先生からは、「障害児者と健常者の『スポーツ統合』の可能性」というテーマでお話を頂きます。最後に大分大学の麻生和江先生からは「知的障害者と大学生の合同ダンス練習会について」というテーマでご報告していただきたいと思っています。

ただ今から報告に入ります。では最初に堀川先生お願いいたします。

## ○堀川 「障害者スポーツからのメッセージ

## ～施設から地域へ、太陽の家の挑戦」

太陽の家の堀川と申します。実は、私、家内のほうが車椅子バスケットの結構名選手でありまして、最近、いろんなところに呼ばれましていろいろ話をするんですが、私がいくら一生懸命話をしてもですね、最後に家内が出てきて障害者自身の体験を話しますと、みんな私の話を忘れてしまうんですね。まあ、はっきりいって私は前座なんですけど、今日は今日で前にうちの局長に全部しゃべられた後ということで、非常にしゃべりにくいという感じでして、一生懸命局長が何をしゃべるかということを聞きながらですね、どこからしゃべっていいのかなって感じで思っておるところでございます。

今、古城先生も言われましたように、できれば最後にみなさんといろんな意見を交換して、これからの大分県障害者スポーツ全体に何か意義のあるお話し合いがしたいという気持ちがありますので、私の話のほうは簡単にまとめていきたいと思っています。

太陽の家は、特に古くは車椅子バスケットボールや車椅子マラソンの普及を中心としていろんな活動をしてきたわけですね。それにつきましては、さきほど吉永

からもいろいろお話があったと思います。しかし現状はですね、今の太陽の家という施設の中でスポーツをしていくということを考えていく中では、もはや車椅子バスケットをバリバリできる、車椅子マラソンをガンガン走れるといった機能の方はほとんどいません。主に、脳性麻痺の重度の方、それから脳血管障害の方とか、そういった障害の方のほうが増えております。いわゆる脊髄損傷でして足のほうは不自由だけど手はバリバリだよという方が多い。仕事もバリバリできるし、スポーツのほうもバリバリできますよって言う人は、ほとんど企業に行っております。これは先ほどもありましたように、太陽の家が37年の歴史の中で、障害者の雇用ということに一生懸命努力したということが、やはり、実を結んだということだと思うんですね。

国際障害者年以降、多くの企業が障害者の方を雇うようになっていく中、多くの障害者の方は就職への道が開けています。しかし、重度な方々は施設にとどまらざるを得ないという現状なのです。ですから、私たちが今施設内で取り組んでいるスポーツというのは、主に脳性麻痺を中心とした重度な障害者の方達を対象としたスポーツであるということをもっと前提としてお話ししたいと思います。

今、私は太陽の家という施設の中のスポーツを言いましたが、それはやはり施設の中だけで展開できるということではありません。私が、今関連しているのが大分県の障害者スポーツ指導者協議会という組織です。これは、日本障害者スポーツ協議会公認のスポーツ指導員の方々が10年前に任意の団体を作り、現在に至っているわけなんですけど、障害者スポーツを唱えた時に、まず必要なのが指導員というか、お世話をする人ですね。これは一般のスポーツのように、名コーチというわけではないんです。特に技術的なことを教えるコーチが必ず要るということではないと思います。むしろ「お世話をする」、「集団をまとめていく」、そして「障害者にいろんな活動をさせていく」といったお世話係です。そういう人が必要となってくるんです。それが障害者スポーツ指導員であると思っております。実は、先ほどもありましたマラソンとか、大分県内の身体障害者体育大会というものを円滑に進めるために大分県の方が障害者スポーツ指導員の養成を10年前から始めました。最初の5年間は大大市内でやりましたから大分・別府の人がかなり増えたんですが、郡部の

人達が少ないということで、その後の5年間は計画を再検討し、日田、三重町それから宇佐というところの3箇所を回り、そこで実はあの打ち切りになっちゃうのですよね。なぜかといいますと、もう障害者スポーツ指導員も200人位いるから、これ位いけばマラソンの補助員も足りるし、支障もなくやっていけるんじゃないかという風になったんです。

私たちが考えたのは、「しかしそれでいいのかな」ということでした。スポーツ指導員の方たちというのは、いろんな仕事を持ちながらやっていますので、新しい指導員が入らなくなると、会そのものがだんだん先細りになってくるということで、実は3年前から私たちの会独自でスポーツ指導員の養成を始めています。初年度、これが例年30人から40人を予定していたのですが80人くらい来ました。去年はちょっと減ったんですが、今年は150人。やりたいとおっしゃる人がいまして、それ全部受け入れたのです。

しかし結局そういう人達をよく分析していきますと、障害者スポーツ指導員になりたい人には3つのパターンがあることがわかってきました。この中にもたぶんいらっしゃるかも知れませんが、学生の方とかが中心になって「とりあえず資格がほしい」というタイプ。まず、スポーツ指導員なんか持っておけば役に立つかなという人が3分の1ですね。それから、次の3分の1が自分は障害者になんらかの関わりを持っている、それから自分は障害者施設で働いている、しかしレクリエーションとかスポーツというものはよくわからないのでそういう知識が欲しいという人達。残りの3分の1はとにかく障害者の人達と何かやってみたい、障害者の人達のお役に立ちたい、ボランティアがしてみたいという人達のような感じです。そういった時に、資格をとるだけの人はともかくとして、「自分が障害者にかかわっている方」というのは、うちの講義を受けてその中でいろんな情報を得たり、それから日本障害者スポーツ協会に登録することによっていろんな情報を得たりしますので、それでも十分に足りているのかもしれない。しかし最後に考えたのが、「ボランティアをしたい人達」。この人達が活躍する場所を作っていないと、「これ詐欺かもしれない」と思ってしまうています。実は講義受けるのに1万円かかるんですが、1万出して資格をとった、でも働く場所が無い、これでいいのかという疑問です。

私たちの1つの合言葉は、「どういう施設でも、どういう学校でも、どういうところでも最低3つのスポーツができる環境づくりをしよう」ということにしています。これはさっき吉永さんが言われましたが、吉永さんが太陽の家に入られたころは、もうバスケットしかなかった。「無理やりさせられていた」と言っていたけど、そのとおりでと思うんですね。他の種目が無いんですから。だから、1つしかなければ障害者の場合、どこまでいっても訓練なんですよ。訓練、訓練、訓練できてるんですよ。そういうのじゃなくて、最低3つくらいあればいいと思うんです。

太陽の家では15競技やってるんですけど、その中から自分がやりたいものを選ぶというのがスポーツの本質なんですよ。スポーツっていうのはやらされたら何にもならない。ということで、今取り組んでいるのは、そういうレクリエーション・スポーツができる環境づくりでして、県内に普及していこうという活動を行っています。

(用具を実際に使用して具体例を示しながら)

「アンボス」という競技種目で、うちの選手が今年ポルトガルの世界選手権に行きました。養護施設「ゆうわ」という、うちの施設にいる障害者の方がポルトガルに行ったわけです。これはもう10年前じゃ考えられない。養護施設で生活の介助を受けている方が世界を目指すわけです。すごいことですよ。というよりも、障害者スポーツがどんどん今広がっております。競技性も高まっています。でも、競技性を高めることだけを考えてはだめなんです。

今、「ポッチャ」という競技はまだ日本選手権しかないような状態です。私たちは太陽の家という大きな施設なので日本選手権に連れて行きました。そこで彼らは目覚めて世界を目指しました。小さな施設の人達が世界選手権に大分から行けるか、というところではないんですね。だから、今私たちは、この普及活動を通じて大分県大会をつくり、来年には九州大会もしたいと考えています。そのことから九州の熊本であるとか、北九州であるとかってところから、やりたいってお話がきているのです。その人達が県に来て、九州大会に出て、そして私たちが日本選手権で得たのと同じように、それをまたもって帰って各地域で広め

てしてもらおう。そういうことを考えていかないと、せっかく今「ボッチャ」という競技がパラリンピックの正式種目として、非常に人気が出つつあるのにもっとしたい。それでは廃れていってしまうのです。

そういったことを考えながら私たちは、施設の障害者1人1人に適したスポーツ活動とともに、私たちが社会、地域に対して何をしていかなければいけないか、という両方を常に考えながらやっていかないといけないと思って活動しております。

### ○綿 「障害児者と健常者の『スポーツ統合』の可能性」

みなさん、始めまして。長崎国際大学の綿と申します。あの、今先ほど堀川先生のお話の中で、奥様が最後に車椅子バスケのことを話されるとそこで阻まれてしまうというお話が一番最初にあって、まさに僕も同感だなんて思います。僕の家族も障害者一家なんですね。

両親が障害者です。母親がうちの場合、全盲で最重度の機能障害を持っているのです。そんな中で育った僕は、一生懸命研究とか勉強をして、例えば「障害者のスポーツってなんだろう」と考えた時に、母親にたまに聞くんですね。母親は障害者ですから、「スポーツって何と?」です。うちの母親はこんなことを考えているんですね。「私は音楽を聞くこと」っていうわけですね。一応僕は体育学部を出て、いろいろスポーツという世界の中にいます。そのなかでスポーツの捉え方というのは、「もしかしたら我々健常者と障害を持たれている人とでは違うのかな」とよく常日頃感じるようになりました。

そういう、いわゆる生の声というのは、我々やっぱり大学で研究している者としては必ず耳を傾けなきゃいけないところなのかなってものすごく痛感します。「その方がやっているものが、その方にとってスポーツと思えばスポーツなのかな」というのが実は存在する世界なのかな、なんてふと今、堀川先生のお話を聞きながら思いました。

今日はですね、「障害児者と健常者のスポーツ統合」という、ちょっと新しい言葉、これがいいか悪いかというのは、皆さんと一緒に議論させていただければと思います。今日のご提案させていただければと思っています。もう一つ、実は僕は今日感慨深いことがあるんです。私は、このレジャー・レクリエーション学会には

大学時代からずっと参加していて、もう20年近く前、初めて学会発表した場なんです。大学院生だったかな。その頃に、障害者スポーツについての発表をしました。その時は、演者が4、5人いらっしやったのかな、その教室に。約15、6年前だと思うんですが、演者以外に聞く人がいないという状態だったんですね。ちょうどその頃というのは、いわゆるバブルの、いわゆるリゾート法であるとか、そういう議論がものすごく多かった。私は毎年、障害者スポーツ関連の発表を続けてたんですが、毎回同じ顔ぶれなんです。毎回同じような状態で、聞かれる方が2、3人バラバラっている状態の中で。それから10数年経って、大会のメインテーマになったっていうことは、これは僕にとってはものすごいことなのです。

僕の障害者スポーツ研究の主眼というのは、実は競技スポーツというよりは、どちらかという、「ロングライフ」の生涯スポーツの方なのです。いわゆるみんなができる、誰でもできるちょっとしたものを、例えば「母親が音楽を聞くことだってスポーツだよ」って言ったその世界の中にも、いわゆる「みんなのスポーツ」って言うのかな、「みんなのレクリエーション」とか、まあ「レクリエーションスポーツ」とかって色々な言葉があると思うのですが、いわゆる体を動かすということの喜びがどういう形で存在し、じゃあその支援体制はどういう風になるんだろうということをこれまで研究として取り組んできました。

その先ほど言いました10年前の学会発表では、障害者の身体活動の継続を阻害する要因に関する調査について報告しました。そのちょうど10年後になりますが、同様の調査研究を実施してみました。非常に興味深い結果がでました。1992年に実施した障害児者の障害スポーツ実施継続の阻害要因としては、「アクセスの問題」、「施設の問題」、「専門指導者の養成問題」などが明らかになりました。このたび実施した調査においても実はほぼ同様の結果となったのです。この結果の意味するところは、障害児者の競技スポーツは年々整備されつつある傾向なのでしょうが、いわゆるロングライフの生涯スポーツへの支援は遅れているというか、進歩していないという状況のようなのです。

今、僕は長崎県にいますが長崎の中でも例えば、障害児・者の指導をしていただける専門のそのボラン

ティアであるとか、指導員の方というのは本当にわずかしかない。じゃあどうの方がやられているかという、本当にそういう指導の資格は持っていないけれども、ちょっと体を動かすのが好きだったりとか、逆に、スポーツという世界には全く関係ない方がたまたまボランティアに行って、そこで出会った人間関係の中でそれをサポートしていたりとか、そんな形で継続されている方がとても多いのです。

さらに今回調査では、「情報不足」というのがたくさんの方からの声でした。これは競技スポーツということではなくて、「ちょっとどこかで体を動かしたいんだけど」、「散歩をしたいんだけど」という類の情報不足、「ちょっと人手が欲しいんですけどどこに電話したらいいですか」といった情報不足があるのかなという風に思いました。

人が、日常生活の中で体を動かすということを定着させるといったとき、どういう形で継続されているかという問題が重要です。そこには必ず誰か、「重要な他者」がいなければそういう活動っていうのは続けられないものがある。例えば、たまたまある方がスキーをやられた、障害をもたれてもスキーを始められた。それは「その方の友人がスキーをやってきたから誘われて行けた」という、いわゆる偶発的なことなんです。

先ほど堀川先生から、これからの選択性の問題があったんですが、「どこに行けばどんなスポーツができるか」という情報提供はとてもやはり大きな今後の課題になってくるのかなと思います。「偶然、誰々と出会ったからスポーツを行っている」というパターンがものすごく多いのです。

お時間の関係で最後の論点は簡単に説明したいのですが、いわゆる学校教育の中で、障害をもった方々への生涯スポーツの定着をいかに進めていけるのかという点について考えてみたいと思います。

私は今、長崎国際大学にいますが、その前は東京都立大学というところにいました。都立大学では障害をもっている学生たちのいわゆる身体活動の援助をしていたんです。その時に僕が迷ったのは、「健常の学生と一緒に混合型の授業をしたほうがいいのか」、それとも「逆に分離をしてそれぞれの専門性を追求したほうがいいのか」ということでした。それで、科研

費をいただきましてそのどちらのほうがより利点があるんだろうということの研究してきたところ、結論の一つとして出てきたのは「やはり一長一短なのかな」ということです。もちろんいろんな議論が入りました。例えば、これは絶対解決できないなと思ったのが、障害をもった方々と一緒に健常の学生が授業すると、これはもしかしたら障害をもたれた学生が教材になりかねないということです。こう考えた場合には、混合の授業っていうのは果たして授業を受ける、教育を受ける権利としていいのかどうかという議論がありました。その中で、でも統合の中のプラス要素としては、お互いの影響力によって初めて仲間ができて生涯スポーツへとつながっていくという逆なケースもあるということでした。ですから、どっちがいいのかといえば結論はでてないのですけれども、やはり一長一短なのかなと思います。

そして最後に、言葉が適切かどうか分かりませんが、『スポーツ統合』についてですが、授業展開の中で実際にやってみたことです。「健常の学生たちが車椅子に乗って車椅子バスケの試合をしてみる」ということでした。これは賛否両論あると思います。「健常の学生が車椅子に乗ることがいいか悪いか」ということでの賛否両論です。

それとともに逆のパターンでもう一つの試みをやってみました。普通のバスケの試合を車椅子のバスケ選手が笛を吹いたり、審判をしたりすることによって、いわゆる健常といわれる方たちのバスケが障害をもった方々のサポートによって展開されるというものです。

我々は障害者スポーツを健常者のスポーツとを分けてしまう。競技への参加という視点で見れば、当然そこにはギャップが出てくるかもしれない。でもそこにもう一つ大きな枠組みの中の「参与」という概念を導入しさえすれば、また違った両者間のかかわりあいができるのではないかと。そうなった時に初めて障害者スポーツや健常者スポーツは統合されてくるのではないかと思うのです。いかに参与ができるかということは今後取り組んでいくことによって、その壁がとれるのではないかと。そういうことによって、一つは障害者スポーツの普及という問題、つまり認知という問題も広がってくるのではないのかなということを感じました。今回はあくまでも試行という段階です。もしかし

たらこれはまだいろんな先生方のご意見をいただきながら、「スポーツの統合」、「一緒にできる」っていうことはどういうことなのかなということについて、まだまだ議論を重ねなければいけないなというふうに思っています。

そういった動きをしていく中で、一個のキーワードとして最後に皆さんにご紹介したいなと思うのですが、長崎国際大学の中にNPOで学生中心とした「福祉なんでも相談室」という相談業務を立ち上げました。実はその中の一つの相談業務にスポーツの問題がたくさん入ってきています。今後、NPOであるとか、もちろんそこには専門職の方々もいるのですけれども、今回やはりボランティアという「力」っていうのは、障害者や健常者のスポーツ統合というところではなくてはならない存在になってくるのではないかなというふうに感じております。

#### ○麻生 「知的障害者と大学生の合同ダンス練習会について」

大分大学の麻生と申します。よろしくお願ひします。お手元のレジュメならびに配布資料をもとに進めてまいります。

知的障害者社会福祉法人シンフォニー利用者と大分大学の学生との合同ダンス練習会は、1998年4月から開始され、現在も継続しております。その経過と成果を紹介したいと思います。なお、私の専門はダンスで知的障害者についての知識はほとんどもっていないものの一人だと思ひます。従って、素人の実践報告ということを強調したいと思ひます。

経緯に入ります。活動開始のきっかけ、この活動は1998年12月に大分大学が主管となって開催されました「全国創作舞踊研究発表会」を契機に開始されました。その始まりは、知的障害者について知識が乏しい私あるいは私どもといひますか、同じような人達が、障害という壁を乗り越えていく時代を迎えたけれども、そのために「自分は何ができるのだろうか」、「何かをしなければいけないのでは」というような、ちょっと焦りのような気持ちもあったと思ひます。

ちょうどこの頃、大分大学教育学部が教育福祉科学部へという移行時期でもありましたが、このことは別に関連していませんでした。もっと、内発的な自発的な動機でした。そこで「知的障害者について実

際に生活をしている姿をもっと知りたい」、「ダンスが好きかなぁ」、「知的障害者と大学生の共同によるダンス作品の創作と作品上演が可能だろうか」、「もし可能であれば、その可能な範囲の中で何らかの成果は上がるはずだ」、「その成果を期待して全国大会で披露しよう」というように取り掛かりの動機は私自身としては非常に真面目でしたけれども、今振り返ってみると実に素朴で単純な発想だったようにも思ひます。

活動内容です。4月から毎月1回大学の体育館で合同練習会を開催しました。毎回約2時間、シンフォニー利用者と大学生で10名程度のグループを作って自己紹介、ストレッチング、リズムダンス、グループで課題を見つけて簡単な創作、発表という内容でした。初年度の参加者はシンフォニー利用者13名、大学生45名でした。その活動の内容や進行は、配布資料の一番目の表にまとめました。毎年おおかたこのような内容や進め方をしております。また、昨年からはシンフォニーの意向をうけて、大学生有志がシンフォニーの施設でダンスクラブを毎週1回開催しております。作品構成は、初年度作品が「生活から題材をとった1分から2分程度の6つのスケッチ」と「3分半程度の全員が参加するリズムダンス」によって構成しました。題材やリズムダンスの曲目や時間の長さは変わっておりますが、これらの内容や作品構成の方法は1回目の方法が現在でも継承されております。

この作品を軸に毎月の合同練習会、毎週のダンスクラブを進行しています。配布資料1番目の表に、各年の作品概要、参加者等、また5番目に作品発表の與数を掲載しております。なお、1999年から毎年12月に大分市文化会館で開催される大分市主催の「福祉のつどい」にも参加を依頼され、作品上演もしております。今年も12月1日に開催されることになっており、「海っていいな」というテーマで参加します。

参加者における成果、シンフォニー利用者について、配布資料の2番目の表に第1回目の参加者のうち、6名における特徴的な行動や言葉あたりについて紹介いたしました。

活動開始時には、大学や大学生になじめなかった様子もうかがえましたが、約9ヶ月間の練習、12月の本番を終えて、多くの参加者がダンスあるいはダンスを介した大学生との交流を楽しく思えるようになったようです。「舞台での演技」、「大学生との友好」、

「大学の体育館に来ることなどを楽しむ様子」は、私のみだけではなく大学生、保護者、職員の観察からも確認できたようです。この活動以外への効果として、一般に開催される舞踊公演の鑑賞のために外出することが多くなった参加者もおります。これらの変化について社会的視野が拡大し、興味あるもののために積極的に行動できるようになったと分析し、この活動の大きな成果であるという評価もいただいております。なお、1回目の参加者も多くは今でも活動を続けております。大学生並びに私における効果については、私も大学生と同じように学んでおりますので、私における効果といたしました。おおかたの大学生からは「楽しい」、「参加すれば手ごたえがある」などの好意的な感想が寄せられました。

活動の開始時は、大学生には「知的障害者に対して失礼があってはならない」という気持ちで先行して戸惑いがちでしたが、活動を続けていくうちに気負うことなく公演ができるようになり、同世代を生きるもの同士であるという認識をもって、親交を深めていくことができました。と同時に、「知的障害がある人はない人に比べて自立した生活を送ることが非常に困難であること」、「そのために障害の無い人がお手伝いできることがたくさんある」ということなど、知的障害のあるということと無いということの違いへの理解を深め、実感することができました。

このことは大学生もシンフォニー利用者と同じように、社会的な視野を広めたということができると思います。また、ダンスや身体活動への意欲や興味の深さは障害の有無を問わず、関わりなく、環境が整えば知的障害者が生き生きと活動できることが可能であることも理解できました。しかしながら、私どものこの活動が未だにめずらしい取り組みとされていることから、その環境はまだ整備されていない現状であることもわかりました。外的な評価については、大学内の発表会で観客に実施した作品感想アンケート等では、「シンフォニー利用者と大学生の共同作品は感動した」、「元気がある」、「生き生きしている」、「楽しい」、「かわいい作品」、「よい取り組み」などおおむね高評価されていました。

これ以外の回答としては、配布資料の4番目の表に示しましたように、「障害のある人と無い人が一緒になっていた」、「協力助け合いを感じた」、「一体感」などの

感想がありました。そして、わずかではありますが、知的障害者への差別とも受け取れるような意見、いわゆる差別と区別のあいまいさから招来される見解の相違、批判的な回答も見られました。

今後の展望に入ります。この活動を通して、私並びに大学生は手助けと受け入れが整えば、「知的障害者の社会的進出の意欲」、「行動力」は確実に高まること、そして、知的障害についてほとんど知識を持たない私たちでもその手伝いをするができることについて身をもって実感することができました。

大きなことを突然試みることは無理です。今、自分にできることは何かを定め、それを足場としてほんの少し新しい試みを起こし、緻密に計画をして進めていく、その試みの継続と積み重ねの結果として生まれ、深まる相互理解や信頼関係の大切さを知ることができました。障害について、特別な知識を持たない人がそれを当たり前に行動できる社会が求められています。私と大学生は、自分ができるところを通して小さい実践をこれからも積み重ねて行きたいと考えております。

以上で、発表を終わらせて頂きたいと思います。

○古城 どうもありがとうございました。お三方のご報告が終わりました。これから質疑応答、意見交換に移ってまいりたいと思いますが、発言に際しましては挙手をお願いいたします。それから発言をする場合には、所属とお名前を必ずおっしゃってから発言をお願いしたいと思います。

○松尾（立教大） 立教大学の松尾と申します。綿先生にご質問させていただきます。

先ほどのご発言の内容に「スポーツの統合」という言葉が出てきました。ここでいうスポーツの統合とは、ただその障害のある人と無い人が一緒にやることを指して統合とおっしゃっているのか、あるいはもっとスポーツの在りようとして、例えばすべての人にスポーツの形を合わせていくようなアダプティブな観点からおっしゃっているのか、その辺を少しお教えいただければと思います。よろしくお願ひします。

○綿 ご質問ありがとうございます。どちらかと言えば後者に近いと思います。統合という言葉が適切かどうかとも分からないんですが、僕の場合、もし統合とい

うと、一つはスポーツを媒体とした、人間交流であるとか人とのつながり合いという形がこれから今後必要になってくるのではないかなと思います。そのいわゆるスポーツという一つの文化というものを媒体としてその真ん中に挟んで、例えば、そこには障害をもった人達と障害をもっていない人達はもちろん競技という世界ではこれはちゃんとした区分があるべきだと思います。なぜならそれは勝負の世界ですから、まずルールというものがあって必ず必要だと思います。それではなくて、もう一個ちょっと楽しむとか、いわゆるそういう「楽しむ」という世界の中のスポーツとかの身体活動とかレクリエーションという中では、それぞれの持つ目的が一致していれば、そこにはお互いが一緒に時間を過ごすということです。もっと砕いて言うならば環境づくりが必要ではないかということです。先生がおっしゃったアダプティブという言葉ですが、僕のアダプティブという捉え方は結構広くて、すべての我々の、健常者側も適応しなきゃいけないし、アダプトしなきゃいけないし、障害をもたれた方もアダプトしてくるという発想にやっぱり立っていかなければいけないのかなというふうに思います。この統合という言葉はいろんな形で使われるんですね。統合教育とかいろんな形で使われて、これが適切かどうかまったくわかりません。

具体的には障害者の車椅子バスケットの人が主催をする健常者のスポーツ大会があるだろうということもありますし、逆に、混在しててもいいと思いますし、逆に健常者の人が車椅子に乗って車椅子バスケットを楽しんでしまう。競技としてではなくて、楽しむ、体を動かすという意味では楽しむという形も今後の可能性としてあるのかなというふうに思っています。

○大谷(福岡大) 福岡大学の太谷と申します。特に指導者養成についてお話を伺います。

今年150人の指導者養成のうち3分の1のボランティアの方に対して活躍の場を与えるということで、指導者としての役割を確保することを考えていく、という非常に重要なお話を聞かせていただいたと思うんですが、そのことに関しまして、例えば一つ上の段階を組織から見て、障害者スポーツ協会、あそこが認定しております指導者資格と技術との関連あるいは、養成をしておられる講座の科目数だと期間数ですね。そ

れと、例えばもう少し学生さんや障害者スポーツ関係者別にして、それだけで150人だったら3分の1の50人が活躍する場がきちんと確保されているのかどうか、あるいはそういったものに関連する事柄についてもう少しお話を伺いたいと思います。

○堀川 今やっぱり障害者スポーツ指導者協会での私の立場もそうですし、スポーツ協会の方でもスポーツ指導員のあり方研究会というのをやっています。そういう中で、どうしていったらいいものだろうかということがありますので、その辺に少し触れたいと思います。

私が今行っている今回の講習会というのは、初級のスポーツ指導員の養成講習会で、それはスポーツ協会のカルテに則った、だいたい3日間につめてやるか、4日間にわけてやるというので全国的にやられている研修の形です。これを終了した人は初級ということになります。今大分県で450名ほど障害者スポーツ指導員がいるのですが、その9割はこの初級になります。その上に中級、上級ということがありますが、それは段々時間も増えます。中級になりますと、年に2回5日間程度の研修がありますので、これがもう全国で何箇所しかやっていませんから、それに行くための費用とかかなりかかるのが現状だと思います。

今私どもの活動をしていく中で、もう一度整理し直していますが、各競技別に部会を作って、その競技の中でまとまりを作っていくと思うんです。というのは450人に連絡をするというのは非常に大変です。それこそインターネットとかでボンと送れる時代になればいいんですけど、まだうちもそこまでいっていませんので、まず450人全員に連絡するのは年に3回くらいの状態です。そこにまずいろんな企画の情報を集めていくということが1つのやり方です。これは、大分県の身体障害者体育大会、それから秋のマラソン、それから総会に向けてという3回はそういう形にしているので、各部会としてはそれまでに情報を集めれば450人全員に連絡しますよというやり方をしています。その他なのですが、種目別に車椅子バスケットであるとかテニスであるとか卓球であるとか、あとポッチャと卓球バレーとは昨年普及活動をしましたので今独立しましたし、それからフライングディスクとかっていう、全部で10の種目の部会をつくっています。各部会

長に名簿を渡して一つ一つの小さな動きに対応できるように、例えば「今回フライングディスクの大会がありますよ」といった時に、フライングディスク部会の人達だけに、まず情報を流してそこから集めるといったようなやり方をとっていかないと動きが非常にコンパクトにできない現状になっているのでそういうことをやっています。

あと障害者スポーツ指導員だけでなく、健常者の方のスポーツ指導者協議会も非常に今行き詰っているという話を聞いております。特に大分の場合は2008年の大分国体を目指して「じゃあスポーツ指導員は何をするのか」という話が2年位前に出たんですが、結論的には「やることはあまり無いではないか」ということさえも言われています。そうじゃなくて、やはりやることは絶対あると思うんですよね。それをもう少し掘り起こして、もしかしたら私たちのやらなければいけない障害者スポーツ大会の方に、健常のスポーツ指導員ですね、日本体育協会の方のスポーツ指導員にお手伝いをしてもらうことがいっぱいあるのではないのかなと今は思っていますので、協力を呼びかけていきたいと思っています。

○大谷（福岡大） 最後におっしゃったことは、非常に重要なことと思うんですね、健常者のスポーツを指導する方々が基本的にわきまえていなければならない事柄は、やはり障害者に関することなのだと思います。

私自身、福岡市で指導者養成をしまして、最近このカリキュラムの中に障害者のスポーツを取り入れるべきだということで1つ入れました。その中から、障害者のスポーツに積極的にかかわる方々がやってきました。そういう効果がありまして、障害者スポーツは障害者だけの問題ではなくて、これから先も特に高齢化が一段と進んでいく状況を勘案したとき、すべてのスポーツに関わる方々がすべて基本的にわきまえておくべき対処ではなからうかと言われていましたので、最後の言葉は大変私の胸にも響きました。ありがとうございました。

○古城 どうも大谷先生、ありがとうございます。おっしゃる通りだと思います。どなたか他にございませんでしょうか。はい、どうぞ。

○滝口（西九州大） 失礼します。綿先生に質問させていただきます。西九州大学の滝口と申します。貴重な報告をいただきましてありがとうございます。

スポーツ統合の可能性の中で、参加から参与という試案を出されておられますが、インフォームド・コンセントという概念から質問したいと思いますが、この「参加から参与」という考えをもう一方では、「参加から参画」という考え、つまりその中身に最初から本人に入っていて企画を与えたらモチベーションも次第に高まるという方向ではどうでしょうか。ご指導たまわりたいと思います。よろしくお願いします。

○綿 ありがとうございます。今まさに先生からご指摘をうけたように、この参加という言葉が障害者区分の中にもいろいろ入ってきたりとかしましたね。その参加という言葉はどう捉えるかと思うんですね。

参加という言葉が、例えば、よく市民参加型とかいいますね。市民参加型と言うけれども、実はあの言葉というのは、本来は福祉の視点から言えばおかしな言葉であって、逆なんですなあれ。ほんとは市民が主人公でいながら、「行政参加型」なんとかと言わなきゃいけないんですが、逆によく現在「市民参加型」って言われてしまう。

この参加っていうのは意外に誤解を招いてしまうんですが、これは本来、いつも参加っていうのは主人公にならなければいけないと、ですから今やっている障害者スポーツも、例えばNPOに入っていた1個の事例の中で、車椅子の人達が山の中をオリエンテーリングで歩く。そのコースをつくる時に、健常の人達がコースを一生懸命つくっているんですね。となると、そこはまさに本来一生懸命考えるけれども、やはりその方のいわゆるアダプトができないというわけですね。となった場合本来ですと、企画段階から言えば、長崎県のオリエンテーリングの九州大会を来年4月29日に開きたいと、そのために今コースを作っている段階の中で、そこの企画の中に車椅子の方々が入ってこないと、まさに参加という中心になる参加にならないのかなあと思うんですね。だから、参加いう中に入り込むのではなくて先生がおっしゃったとおり、これからはお互いが真ん中にある参画でなければいけないのかなあというふうにまさに思います。

○松尾（立教大） 何度もすみません。麻生先生にご質問させて頂きたいと思います。

先日、名古屋女子短期大学の岩田先生とご一緒させて頂いた折に、知的障害をもった子ども達とボランティアの学生達で練習会を通して「トライアングル」という会を作り、発表会を約1年かけて作り上げていくとおっしゃっておられました。

その時に、今日のご発表の中にもありましたけど、どう評価するのかと、それをどのように私どもは評価し、広げていくのかということがとても重要だと思うのですが、その時に、私は身体といましようか、生理学的にどうのこうのという身体像ではなくて、むしろ例えば長い間杖をついている人は杖の先が指先のように感じるというような、いわば、身体感覚や身体意識というものを組み込んだ身体というものを一方では想定し、その音楽やダンスによって、どうそれが広がっていくのかというような評価視点というのはとても重要なんじゃないのかというふうに今思っているのですが、それについては先生にコメントをいただきたいのですが。そして、もしそう考えた時に今行われている取り組みはとても大事な取り組みだと思うのですが、その持っている可能性と、ある意味では一方で非常に難しいところといましようか、限界点といまようか、難しいところでいかと思います。その辺についてコメントを頂ければと思います。よろしくお願ひします。

○麻生 まず評価ということで最近になって思ったのは、私たちの視点で作品をまとめようとか、うまくとかってというのは、彼らにとってはほとんど意味が無い、そこまでするとやらせになってしまうんですね。無理やり、先ほど訓練という言葉が出ましたけれども、嫌になってしまう。それは、うまいほうがいいのかもいれないけれど、自分がうまくなりたいと思うまでうまく踊りなさいっていうふうにはもっていかない。ちゃんと踊ろうとか、できるようになろうとか、みんなと一緒にしようとかまずその辺から持って行って、評価というのは私たちの作品の評価とは少し違うと思います。なるべく彼らが、その時の気持ちが反映できるようなもっていきかたをいつも心がけております。その時々話題とか活動とか彼らが何か表現したいんですね。何か下を向いてゴゾゴゾやり始める。そういう姿

が現れるような活動内容を工夫しております。

それから身体的な面ですけれども、最近私も常々思っています。と言いますのは、すごく一生懸命活動するんです。自分の体力とかも省みずに活動して急にパタッと倒れてしまうとか、急にもどすとかそういう人が何人かおります。彼らは、私たちと違って運動することによって、体を鍛えようとかそういう感覚が全然ないんです。逆にそうなってくればいいなあと思ったりすることもあるんですけども、そこら辺はまだ私の頭の中でもつながらないし、彼らも運動することによって運動不足が解消できて気持ちいいけれども、それをもって体に何か効果を得ると言うような、そういう気持ちは無いようですし、こちらも運動不足が解消できるとか、気持ちがいいとか言えるけれども、長期抵抗でそれに向かっていけるかどうかというのは、ちょっと不安というかそうできればいいなあとというふうには思っていますけれども。

それから最後に、ダンスだけじゃなくて、ダンスはもちろんこれからも続けて行きたいと思っております。でも彼らが求めていることは、ダンスもあるんですけども、実は大学生と交流するというはすごく楽しみなんです。月に1回、週に1回大学生に会えるということがすごく楽しみで、大学生が直接指導に当たってくれるんですけども、例えば大学生と話をすること、それから大学生と時々ボールゲームをしたり、ボールゲームになるかわかりませんが、ボール運動をしたりとか、いろんなことをします。ダンスだけじゃなくて。そうしますと、ダンス合同練習会=そういうダンスを含めたそういう活動というように捉えているようです。だから、ダンスだけではなくて、他の障害者の方について言われましたように、知的障害についてもっといろんな分野が架設でき協議会とかできたらいいなというふうに思っております。

○古城 まだまだ発言したい先生方もたくさん居られるんだろうと思います。ただ設定された時間が近づいてきております。後まだワークショップも控えております。大変残念ですけども、シンポジウムの方は終わりにしたいと思います。

シンポジストの3人の先生方からは、大変貴重なお話をうかがいました。そして、みなさんからも大変貴重な質問を頂きました。時間がうまくもつのかなと

思っておりましたが、あっという間に持ち時間が来て  
しまいました。

ほんとうにご協力ありがとうございました。最後にシ

ンポジストの3人の先生方に大きな拍手で感謝したい  
と思います。では、これもちましてシンポジウムを  
終了したいと思います。ありがとうございました。